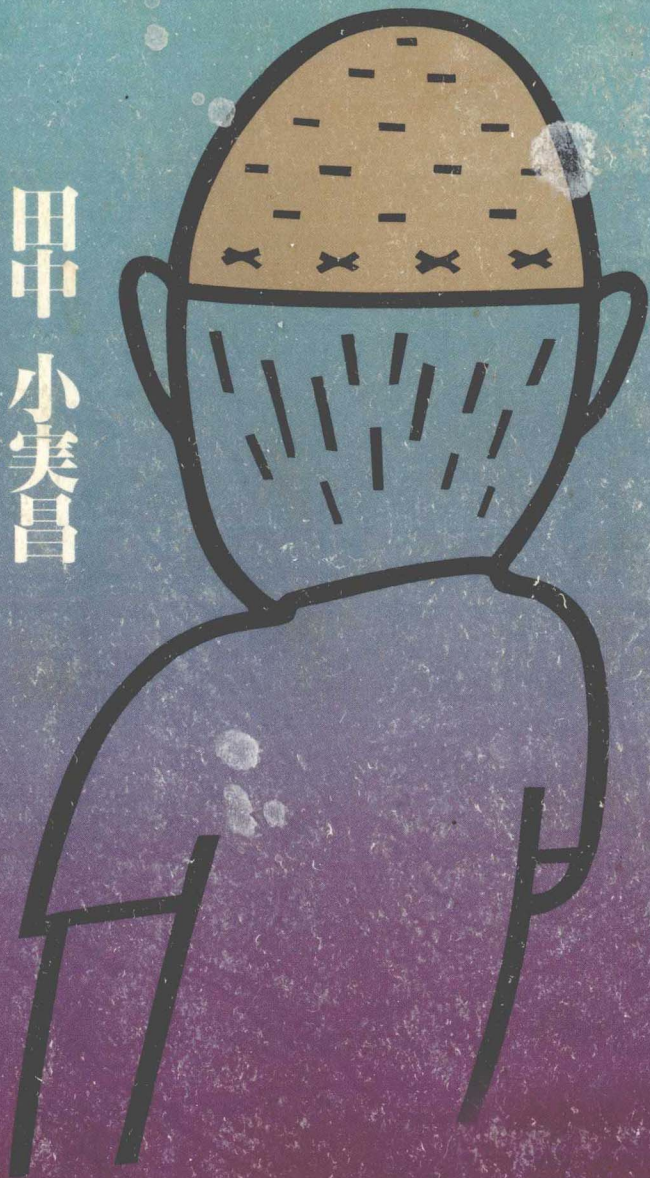


インデアン・ピート

田中 小実昌





インデアン・ピート

田中実昌

インデアン・ビート

定価 九八〇円

著者 田中小実昌

昭和五十五年八月十五日 第一刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一一二

電話 (〇三) 九四五―一一一 (大代表) 振替東京八―三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社中沢製本所

© 田中小実昌 Komimasa Tanaka 1980 Printed in Japan

乱丁本・落丁本はお取り替えます。

インデアン・ピート

もくじ

★ベビー・シッター

5

★洋子はどこのコ

27

★とんび宿

47

★インデアン・ピート

69





★犬のこと

119

★選挙フン戦記

139

★新宿まわり道

173

★ある役者の消息

193

装幀

装画

本信公久

東君平



ベビー・シッター

小貝ユリ子の記者会見は、羽田国際空港ビルの特別室でおこなわれた。特別室といっても、つまりは貸ルームで、この部屋もそんなに大きくはない。

しかし、今どき、アメリカにいくスターなどはめずらしくないのに、さすがは、大スター小貝ユリ子だという気もする。

記者たちとむかいあった、なにかスクエアな（かたくるしい、角ばった）感じの椅子に腰かけ、小貝ユリ子はほっそりすんなりした脚をグレースフリースフリースにくだ。それは、優美にとか品よくとか、うつくしく、しとやかにとか言うニホン語には訳せない、そう、なにかソフィステイケートドの感じもくわわった動作だった。

しかし、小貝ユリ子が着ているものは、ちょっと見たところ、きみょうともいえた。ウールのニットのツービースなのだが、グリーンの生地イチゴのように赤い、また、イチゴみたいな私たちのドットがあり、まことに安物じみたものだったのだ。

グリーンとか青とか言っても、国によってデリケートなちがいがあ、たとえば、一番町のイギリス大使館の窓枠に塗ったグリーンのペンキにしても、ニホンにはないみどりの色だ。

小貝ユリ子が着ているニットのツービースのグリーンも、すこしむらさきがかったような、ニ

ホンにはない、だが、アメリカではたいへんに俗なグリーンで、このニットのツーピースにしても、アメリカの田舎町のグレイハウンド・バスの待合室のよこの売店にぶらさがってる安物といった感じだ。

だが、小貝ユリ子がそれを着ると、パーク・アヴニューの高級婦人服店のドレスを着たように……ということもない。

安物のウールじみた感じはそのまま、しかし、しっとり、それこそグレースフリーに、それは小貝ユリ子のからだにからまつている。

(ほんとに、これは、小貝ユリ子がグレイハウンド・バスの売店あたりで買ってきた安物かもしれない。そして、記者のうちのだれかが、着ているものについてたずねたら、ユリ子は、あの大きな目を、くるつとうごかして、いたずらっぽく、じつは、これ、この前、アメリカにいったとき、ロングアイランド鉄道の駅前のスーパーマーケットで、七ドル五十セントで買ったものの、とこたえるのをたのしみにしていたのかもしれない)

さつき、おれは、安物じみたウールのニットが、小貝ユリ子のからだに、しっとり、グレースフリーにからまつている、と言ったが、小貝ユリ子のホネに、とおれは言いたかった。

小貝ユリ子はホネ美人だ。小貝ユリ子みたいにホネのうつくしい女優は、ニホンにはいない。昔の小貝ユリ子の映画のスチール写真をみて、おれはふきだしたことがある。彼女がふっくらまるい頬っぱたをして、そのほかのところも、すべすべまるっこかったからだ。

あのころは、小貝ユリ子は、まだ中学生だったのではないか。だが、もう、たいへんな人気女

優だった。売り出しの人気女優という言葉はあたらない。小貝ユリ子は子役でも有名だったし、だから、すこしブランクがあつて、あのころは、再売り出してことになる。

その人気は、彼女の高校三年のときぐらいまでつづき、また、ふっとブランクがある。とつぜん、彼女がアメリカにいつてしまったのだ。

そして、三たび、小貝ユリ子はスクリーンにもどってきたが、そのときには、それこそ女優に生まれついたような、大スターの貫禄を身につけていた。妖しいホネのうつくしきをもった若い大女優だ。

——こんどのアメリカ行は、ひさしぶりの休養ですか？

——ええ、でも、ちよつとお仕事のこと……。

記者たちと小貝ユリ子のやりとりはつづいている。記者の数もそんなにおおくはない。

——お仕事？　すると、日米合作映画の打合せとか……。

——合作ではありません。ニューヨーク派というか、そういった映画関係の方々からおはなしがあつて……。れのヘタクシ・ドライバーやヘニューヨーク・ニューヨークのマーチン・スコシージ監督ともあう予定です。

——あなたがアメリカ映画に？　ニホン人の女の役で？

——それがちがうんです。北極の氷の島からニューヨークにきたエスキモーの娘。
へ真夜中のカウボーイではなく、真夜中のエスキモー娘か……おれは、ひとりで、ハ、ハとわらつたが、記者たちはあまりわらわなかった。

——結婚はどうですか？ 未婚の大女優といえば、もう、あなたひとりぐらいいですからね。

——じつはそのことなんです、わたくし、こんど結婚いたします。

小貝ユリ子はくんでいた脚をおろし、頬のホネをうつすら染めた。

——ほ、ほんとですか？

はんぶんぐらいの記者の尻が椅子のなかでとびあがった。

おれは、逆に、椅子の座を尻がつきやぶったような気がした。

小貝ユリ子は結婚しているのだ。それを知ってるのは、この記者会見の連中のなかでも、おそらくおれひとりだ。いや、ふしぎにおもうだろうが、小貝ユリ子自身、自分が結婚していることを、知らなかったはずだった。

それなのに、わたくし、こんど結婚いたします、と小貝ユリ子の口から言われたんでは、大びつくりで、こまっしてしまふ。

いや、までよ……おれはびつくりしたのをとりかえすように、わらった。小貝ユリ子だって結婚してもいいではないか。女優も結婚する。とくに、近ごろでは、若い、それこそ売り出し中の女優でも、さっさと結婚してしまふ。

しかし……、おれは、わらったぶんだけ、がくんとなった。結婚の相手は？ という記者たちの質問に、小貝ユリ子は、「比野二郎というひとで……」とこたえたのだ。

——なにをしてる方ですか？

——K大の経済学部を卒業して……お父さまは会社を経営なさってたのですが、なくなったの

で……。

——じゃ、その方はお父さんの会社の経営をひきついで……？

——いえ、今は、お姉さんのご主人が社長さんです。比野……さんも会社の役員にはなってるようですが……会社にはいつてません。あの小説を書いているんです。でも、まだ、小説はどこにも発表してなくて……。

小貝ユリ子の目がくろく濡れていた。ユリ子はとくべつ色白で、目も青みをおびたような淡い茶色だが、それが、あかるい色のものでも濡れるとくろずむように、くろく濡れている。目がうるんでいるのだろう。

しかし、どんなおもいで、目がうるんでいるのか？　くやしさか？　腹だたしさか？　だったら、なぜ、小貝ユリ子は、比野二郎と結婚する、などと記者たちに言ったのか。むしろ、比野二郎のことはひた隠しにし、なんかの解決方法をとるはずではないか。

——ご主人になるその方とは、どこで知りあったんですか？

——アメリカのメイン州のホールトンという町の大学で……。

——この前のアメリカ旅行で？

——いえいえ、わたくし、高校をでたあと、この町の大学にはいったんです。メイン州はアメリカでも、いちばん東北にある州で、このホールトン^{カレッジ}って町が、また、カナダとの国境まで二十マイルしかない、ほんとに東北のはずれの、人口一万もない町なんです。カレッジも学生数が四百人ぐらいのちいさな大学で、そのかわりキャンパスはひろく、ひとつのクラスも、せいぜい

五、六人ほどの学生で、考えてみれば、ずいぶんぜいたくなのね。彼は、K大の経済学部で、その大学にきていて、今は、なにかルートがあつて、ニホンの学生がたくさんいるらしいんですけど、そのころは、ニホン人の学生なんてほかにいないし、わたくしたち、すぐお友だちになり、そして、ふしぎなのねえ、はなしてみてもわかつたんだけど、彼とわたし、じつは幼なじみなのよ。ずっとつき合いもなかった幼なじみと、アメリカも、しかも東北のそんなへんぴなところの大学でいっしょになるなんて……。

記者会見はつづいていたが、のこつてる記者ははんぶんぐら이었다。ほかの記者たちは、「小貝ユリ子・結婚」のニュースを、大いそぎで、電話で送りにいったのだろう。

新宿ゴールデン街の「M2」で半公と飲んでると、階段をあがってくる足音がし、それから、ぼこん、という音がきこえ、おれと半公はふきだした。

「M2」は二階にあり、ゴールデン街の路地から急な階段がついている。そして、二階の床になるところが、なぜか、階段の上につきでいて、バカなやつが、こいつに頭をおつけるのだ。

新宿ゴールデン街はもとの青線で、女が客をあげて寝ていた二階をバーに改造して、路地にでる階段をつけたのだろうが、そのゼニをケチつたため、こんなやつかいな階段になったのにちがいない。

頭をおさえながら、「M2」にはいつてきたのがジロ（比野二郎）なので、半公とおれは、ま

たふきだした。

ジロのやつは、おでこにでっかいコブをつくっている。

「いやあ、こんなコブ、めずらしいなあ」

半公が感心した声をだした。ほんと、おれも久しくコブにお目にかかってない。戦後、ニホン人の体質が変化して、コブができなくなったんだらうか？

昔は、コブなんて、しょっちゅう、だれかがこしらえてたのに、この二十年くらい、ぜんぜん、コブにお目にかからない。

「それに、つやのいい、みごとなコブだよ」

半公は、まだ感心している。まったくつやのいいコブで、てらてらひかっていた。ぶんぐられて、目のまわりがくろくなったアザの派手派手しいやつを、米軍キャンプのG・Iたちは、シャイニング・ブラックアイと言っていた。

ひかりかがやくブラックアイ……ジロのコブも、おデコの皮をまるくつっぱりあげ、ひかっている。ちやうど、餅を焼いててふくらんでくるとき、ぬめらかなひかりがでるように……。

「頭にきたよ」

ジロは頭をおさえて言った。ジロのからだはかなり大きい。それに、かたぶとりの肉がついている。若さをあらわすような、ばっちり肉のつまった肉づきだ。こいつで、頭をぶつけられ、がつしりした体重がうしろにくわってゐるから、痛いだろう。

「しかし、おでこにコブをつくって、なんで、頭をおさえてるんだ？」

半公が言った。じつは、さっきから、おれもそうおもってた。

「今、頭もぶつつけたからさ」

ジロはこたえた。顔も肉づきがよく、坊っちゃん面だ。

「頭をぶつけて、どうして、おでこにコブができる？」

半公はたずねた。おれも、そうおもってたところだった。

「このコブのことで、頭にきてるんだ」

ジロは頭をおさえていた手をさげ、おでこのコブに、人差指のさきをもっていった。もっていっただけで、コブにさわらないで、ジロは頭をふった。

頭にくる、という言葉は、今では、女のコでもつかっているが、前は、たいへん特殊な者、おれたちヤー公ぐらいしか口にしなかった。ヤーさま、なんていやらしい言葉が、関西あたりから広まってきてるようだけど、おれたちがヤー公と言うときは、テキヤのことだ。

「まったく、頭にきたよ。いきなり、パンチをくらわしやがった」

「だれが？」半公はきいた。

「小貝ユリ子の用心棒」

「小貝ユリ子みたいなちゃんとした女優にも用心棒なんかがいるのかい？」おれは信じられなかった。「ジロ、おまえ、小貝ユリ子になにかしたのか？」

「なんにもしないよ。ただ、よう、って言ったただけだ。それなのに、いきなり、パンチを……」

「どこで？ いや、おまえぶんなぐられたのは……」

「日比谷スタジオだよ。佐川ユミがいたいって言うから、日比谷スタジオにいったんだ」

「おまえ、まだ、あんなデチもろのだれとでも寝るちんぴら歌手とつきあってるのか？」

「あのコがどんなにデチもろでも、オジちゃんたちとは寝てくれないよ。ともかく、佐川ユミと別れてかえろうとしたら、廊下のむこうの奥の個室から小貝ユリ子がでてきて、おれが、よう、って声をかけたら、部屋にひっこみ、ユリ子のうしろにいた用心棒みたいなやつが、おれに、ちよつとと言うから、いっしょに、エレベーターのところにいて、なんだてめえ、とタンカをきいたら、がつーん、パンチをくらって、ほんとにふつとんじやった。そして床におちる前に、うしろの壁にオデコを、ごっん！」

「ジロ、おまえ、K大のボクシング部だったんじゃないのか？」

「うん。だけど、あれは、すごいパンチだった。あの野郎、からだは小柄だけど、あれは、全身筋肉といった感じでさ。アッパーカットをくらったんだけど、そいつが、音もなく、なんだかしずかに、すーつとのびてきて、ふつとんじやった。あれは素人じゃないね。プロだ」

「おまえのそのでかい図体が、一発でふつとぶんじゃ、プロだよ」

「その男は小柄だと言ったが、顔は、よく見たかい？ 坊主がりの頭のこのところに……」おれはおでこのまんなかの毛の生えぎわを、左手の中指でたいた。右手はジンのグラスをもってゐる。「ネズミの尻尾みたいな、すこし長い毛が、ちよろつとはえてなかった？」

半公がわらいだし、ジロも、おれが言ってる意味がわかり、ニヤニヤ首をふった。

「タコちゃんじゃないよ」